

ドルチェット・オ・スケルツェット

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

日本人は口実を見つけては騒ぎたがる。

だが逆に言えば、口実がないと騒ぐ事も出来ないという事だ。

基本的に真面目な人種なのだろう。騒ぐための言い訳——免罪符を探している。

ハロウィンも同じだ。

本来は宗教的な行事だったが、日本では完全に仮装パーティという認識しかない。

別にその事自体はどうでもいいし、ニュースで馬鹿騒ぎをやってる連中を見ても何も思わない。

問題があるとするれば、自分が巻き込まれてしまう場合だ。

「——トリック・オア・トリート！」

学校から帰宅し、自室で私服に着替え終わって、さて夕飯までどうするかと思案した矢先の事だ。

魔女が俺の部屋を訪ねてきた。

「……………」

「リアクションうすーい。ほらほら、仮装だよ？」

そう言つて魔女がぐるりと回った。ひらひらした生地が多いデザインのため、ふわりとそれらが揺れる。

「あー…………うん。可愛いぞ」

嘘ではない。実際、魔女は可愛かった。

「本当!?! えへへ」

魔女とは思えない天真爛漫な表情を浮かべ、彼女は嬉しそうに笑った。単純なのか、それとも純粹なのか、判断に困る。この魔女と暮らすようになってそれなりに経つので、彼女の計算高さや、あざとい部分も知っているだけに、判らなくなる。

魔女の名前はベアトリーチェ。

ゾイエス
Z S 学園中等部に通う一年生で、俺の後輩に当たる女の子だ。

一つ屋根の下に同居している三姉妹の末っ子で、俺の事を『お兄ちゃん』と呼ぶ。

「しかし、魔女か。去年の…………ん？ 去年のハロウィンで、たしかタオエンが魔女の仮装を…………あれ？」

記憶が混濁している。去年のハロウィンって何だ？ ベアトリーチェ達とは親戚だから、付き合ひ自体は長い。だが、去年のハロウィンの時点で同居していたか？ いや、このハロウィン自体が二回目じゃないか？ いや、そんなはずは…………。

「お兄ちゃん、難しく考えない方がいいよ？　ここはほら、『サザエさん』的なアレだから」
「……そうか」

苦笑気味なベアトリーチェの言葉に、俺はとりあえず頷いた。
何か大きな力が働いている気がする……。

「それよりお兄ちゃん。これ、魔女じゃないよ？」

「違うのか？」

「違うよ、魔法少女だよ」

今度はさつきと逆方向にベアトリーチェが回った。やはり生地がふわりと揺れる。なるほど、魔法少女といえそうかもしれない。

「なら、コスプレじゃないのか？」

「コスプレ扮装も仮装も同じようなものだよ」

一緒くたにしていいか判断に困るが、ベアトリーチェが楽しそうなので、わざわざ気分に水を差すのも無粋だろうと思い同意しておいた。

すると――

「……でも、お兄ちゃんへの愛に狂って魔女になっちゃうかも」

ふいに、ベアトリーチェが蠱惑的に唇を震わせた。立てた人差し指を顎に当て、上目遣いに俺を見上げる表情は、ぞくりとするほど扇情的に見えた。

「魔女になっちゃうとね、もう元には戻れないんだよ？　その存在が消滅するまで、世界に呪いを撒き散らすの。絶望、悲しみ、怒り、憎しみ、憎悪、嫌悪、憤怒、怨嗟、恨み、辛み、妬み、嫉み……」

「べ、ベアトリーチェ？」

ベアトリーチェの雰囲気、明らかに常軌を逸している。

「そうなる前に浄化して？　真つ黒に濁りきっちゃう前に。魔女になってしまいう前に」

まるで、人を惑わし、取引を持ちかける悪魔のように俺を見つめる。その黄色い瞳から目が逸らせなくなる。

「……どうすりゃいいんだ？」

「スリーピングビューティ眠り姫の呪いを解く方法は？」

「……判った」

俺はベアトリーチェの小さな顎先に右手を添え、軽く上を向かせる。身長差があるため少し屈み、その桜色の唇に自分のそれを重ねるべく距離を縮める。やがて、互いの吐息が

聴こえるまでに肉薄すると――

「――はい、そこまでです」

「……………へ？」

間の抜けた声を発したのが自分である事に気付くのに、相当な時間を要した。

気付けば、俺とベアトリーチェの間にタオエンが割って入っており、開いたドアの外からは、恨みがましい表情をしたヤミヒメの姿も見えた。

「えー。もう終わり？」

「終わりです。悪戯トリックはもう充分でしょう」

何やらベアトリーチェがタオエンに不満を漏らしている。

「さあ、ここからはおもてなしの時間です。さっそく撮影会を始めますよ」

「……判ったよ、タオ姉。お兄ちゃん、また後でね」

そう言つて俺に手を振つて部屋を出ていくベアトリーチェと、微妙に舌打ちのようなものをした気がしたタオエンを見送る。

「なあ、状況がいまいち飲み込めてないんだが」

未だにドアの外に身体を半分隠した、『目撃者スタイル』のヤミヒメに声を掛ける。

「ベアトリーチェの持っていたステッキだ。あれに人間の判断力を一時的に低下させる機能があるとかで、貴方あなたはそれにしてやられたという訳だ」

『目撃者スタイル』をやめ、ヤミヒメが全身を現して説明する。あのステッキをベアトリーチェに渡したのがタオエンで、その見返りとして、ベアトリーチェは今頃、タオエンの部屋でフラッシュの餌食えじきになっているらしい。

「言われるがままになつてたのは、そのせいかな。というか、なんでそんな危険なもの持つてるんだ、あいつは…………？」

「……一応訊きくが、あのステッキのせいで迷いなくベアトリーチェに、その……しようにしていたのだろうか？」

「あ？」

「だから、ステッキの機能がなければ、拒んでいたのだろうなと訊いておるのだ！」

ヤミヒメが頬ほおを若じゃっかん干赤くし、怒鳴るように言った。あのままタオエンの『ストップ』が入らなかつたら、恐らく、ベアトリーチェにキスをしていただろう。だが、それはあくまでステッキのせいで、ベアトリーチェに誘われたからとほいほいキスをするなんて事はあるはずが…………。



「……当然だろ」

「……ふん。ならばよい」

いや、ない。断じてない。あれは判断力が鈍っていたただけであって、ベアトリーチェの
雰囲気になされた訳では決してない。

ない……よな？

ドルチェット・オ・スケルツェット (´▽`)

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ソイエス
ZS 〈ゾイドチック・ストラテジー〉『ドルチェット・オ・スケルツェット』をお届け致します。

劇中で少しメタな事やっていますが、この世界は『サザエさん』方式です。去年のハロウィンにはなかった事になっているというか、『この時間軸』ではなかった事になっているというか……つまり、そういう事です。ご都合主義です。

ネタ的な事というと、ベアトリーチェの言っている魔女うんぬん云々は『まどマギ』です。この世界で『まどマギ』が放送されているかどうかは判りませんが。あのシーンのベアトリーチェの描写は自分でもお気に入り、ロリ系の娘こが外見に不似合いな事をやるのって、背徳的で良いですね。

ちなみにサブタイトルの『ドルチェット・オ・スケルツェット』はトリック・オア・トリートのイタリア版です。

それでは、良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

現在、10月31日の午前3時です。『Z A O D』の準備で今年のハロウィンは無理かと思っていました、なんとかなるもんですね。

まあ、ページ数が少ないですから。

次のイベントは正月か……。

2015 / 10 / 31 流遠亜沙

アンケートに答える

『ZS 〈ゾイドチック・ストラテジー〉』ページに戻る